

萬葉歌釋義

著者	伊藤 博
雑誌名	文藝言語研究．文藝篇
巻	5
ページ	160-180
発行年	1981-03
その他のタイトル	An Exegetical Reading of Some Manyo Poems
URL	http://hdl.handle.net/2241/13823

萬葉歌釋義

伊藤 博

一

昭和四十六年から、友人数人と、新潮古典集成の『万葉集』（全五巻）の仕事に専念している。各人の担当部分についてそれぞれ原稿を作り、それに対し全員がさまざまな書きこみを行なった後に、一首一首討論して定稿を作るのが習いとなっている。しかし、この書物はB6版での頭注方式なので、紙幅に恵まれない。それで、折角の実り多い討論にもかかわらず、その成果を充分に盛りこむことがむづかしい。言葉は切りつめられるだけ凝縮され、書き手の意図を充分に示しにくいばあいが少なくない。

この稿が活字になるころには、古典集成『万葉集』の第三巻が公刊されて半年程度は経過しているはずである。第三巻における伊藤担当分は、巻十一の二三五一番から二六一八番まで、すなわち、旋頭歌一七首、短歌二五四首である（或本の歌を含む）。この中からいくつかの目ぼしい歌を取りあげ、古典集成『万葉集』の簡潔な結論に対し、風穴を通す作業をこころみることにしたい。

なお、この部分の討論に加わったのは、井手至・橋本四郎・伊藤博の三人。青木生子・清水克彦の両氏は、病氣治療のため、やむなく欠席されたことを付記しておく。

二

人所^レ寐 味宿不^レ寐 早敷八四 公目尚 欲嘆(二三六九)西本願寺本に拠る。以下同様。
この歌、旧訓には、

ヒトノヌル ウマイモネズテ ハシキヤシ キミガメヲスラ ホシミナゲクカ

とある。だが、第二句は、『万葉考』(賀茂真淵)がウマイハネズテと改め、第四句は、『万葉代匠記精撰本』(契沖)がキミガメスヲと改めたのが正しいであろう。

第二句については、

……人之宿 味宿者不^レ寐哉 恋ひわたりなむ (卷十一、二九六三)

……人寐 味寐者不^レ宿爾 大船の ゆくらゆくらに 思ひつつ 我が寝る夜らは 読みもあへぬかも (卷十三、三三二九)

が傍証となる。坂本信幸氏(「官人の安宿も寝ず」万葉七十八号)が説かれたように、「味寐」とは、男女共寝のよき眠りをいう。対して、よく似た語「安寐」は、一人寝の安らかな眠りをいう。この「安寐」については、

我妹子に またも近江の 安の川 安寐毛不^レ宿爾 恋ひわたるかも (卷十一、三一五七)

粟島の 逢はじと思ふ 妹にあれや 夜須伊毛禰受旦 我が恋ひわたる (卷十五、三六三三)

官人の 夜須伊毛禰受旦 今日今日と 待つらむものを 見えぬ君かも (卷十五、三七七一)

のように、「安寐も寝ず」とはいえ、「安寐は寝ず」とはいわない。これは、「安寐」が、「安眠さえもできないで、ひとり恋い焦れている」というように、我が身一つの内の世界で嘆く文脈の中で用いられるのに対し、「味寐」は、ことごとくが(四例)、上に「人の寝る」を修飾語として伴い、「幸福な外の男女のように私は私は共寝ができない」というように、常に他人との対比において嘆く文脈に据えられているところに、原因がある。考の改訓

は動かないであらう。一方、第四句については、

……家人の 春雨須良乎 問使にする (巻九、一六九八)

……我が恋ふる 人の目尚矣 相見せなくに (巻十、一九三二)

など、「すら」と「を」とが複合するときには「すらを」の構成を採るのが普通で(九例)、「をすら」の形は「一重のみ妹が結ばむ帯平尚」(巻四、七四二)など二例しかない。この片寄りは、後に述べるように、古代においては格助詞「を」の勢力がまだ弱かった点に基づくものと考えられる。当面の歌が万葉でも前期の人麻呂集歌であることを思うとき、これも、代匠記の改訓に由緒があると見るべきである。

問題は結句である。旧訓の「ホシミ」はミ語法としての訓であらう。しかし、動詞「欲る」と形容詞ミ語法形とには性格の類同性が認められ、したがって、形容詞「欲し」がミ語法を構成することはないと考えられる(橋本四郎「ミの形をめぐる問題」万葉四十二号)。この辺の事情を知ってか知らずか、当面の語句に対しては、諸家によつて次のような改訓がほどこされ、しかも定着しないまま今日に至っている。

A ホリテナゲカム (万葉考)

B ホリテナゲクモ (万葉集略解)

C ホリシナゲクモ (新訓万葉集)

D ホリシナゲカフ (定本万葉集)

右、AとDのうち、現在ではAはまったく顧みられず、BとDの三訓が行なわれている。古代語「欲る」には用法に片寄りがある。記紀歌謡には、

琴頭ことかみに 来居る影媛おけひめ 玉ならば 我が哀ホル屢玉あはびしらたま (紀歌謡九二)

のように連体形の用法があるけれども、万葉集では、連用形「欲り」以外はなく、それも、大部分、「見まく欲り」「目を欲り」など、固定した形の中に表われる傾向がある。そして、他の活用形が要求されるばあいには、サ変動詞「す」と複合した「欲りす」の形が用いられている。もっとも、巻十一、二五五五

朝戸を 早くな開けそ あぢさはふ 目之乏流君 今夜来ませる

の第四句など、一部にメガホルキミガと訓む例もある。古典集成本でも、一往この訓に従っておいたけれども、「目が欲る」の形は他になく、なお疑問が残る。したがって、「君が目を見^{ミマク} 欲^{ホシ}」(巻十一、二三八二)のように「欲りして」という形はありえても、「欲りて」という形は古代では考えにくい。その点では、従来の訓の中では、CDが穩当である。

けれども、Cの「欲りし嘆くも」には落ち着きがない。助詞「も」が動詞と結合しながら文末に用いられるときには、

秋萩の 散りゆく見れば おほほしき 妻恋ひすらし さを鹿鳴母^{ナカモ} (巻十、二一五〇)

圓方^{またかた}の 港の洲鳥 波立てや 妻呼び立てて 辺に近著毛^{チカヅケモ} (巻七、一一六二)

あさりすと 磯に住む鶴^{つる} 明けされば 浜風寒み 己妻喚毛^{おのづまうも} (巻七、一一九八)

一年に 七日の夜のみ 逢ふ人の 恋も過ぎねば 夜は深往久毛^{フカユクモ} (巻十、二〇三二)

かの子ると 寝ずやなりなむ はだすき 浦野の山に 月可多与留毛^{ツクカタルモ} (巻十四、三五六五)

朝開き 漕ぎ出て来れば 武庫の浦の 潮干の潟に 鶴が声須毛^{スモ} (巻十五、三五九五)

のように、とらえられた対象は、自分以外の客体であることが多い。第一例の「く鳴くも」などは、結びの型として慣用化されており、「動詞十も」の文末を持つ歌三五例中、一九例を数える。

いま対象にしている歌は、好きな人に逢えないで一人寝の夜な夜なを過す自分の悲しみを嘆いた歌である。だから、その自己の嘆きについて「欲りし嘆くも」と歌うのは、第三者の嘆きをとらえたかのような錯覚を誘う余地がある。もつとも、自己の行為について、「動詞十も」の文末を用いた歌がないわけではない。

上野^{かみづの} 久呂保^{くろほ}の嶺^ねろの 葛葉^{かづは}がた 愛しけ子らに 伊夜射可里久母^{イヤサカリクモ} (巻十四、三四一二)

青柳^{あやなぎ}の 萌^はらる川門^{かはと}に 汝^なを待つと 清水^{しみず}は汲^{せみど}まず 立処^{たちどころ}奈良須毛^{ナラヌモ} (巻十四、三五四六)

など五例を数える(他に、一二五六・三四八九・四一三五。「動詞十も」の文末形は、「客体的状態に移入された情意

を沈潜的に対象化すること」(『時代別国語大辞典 上代篇』に本義があつたと思われるから、こういうばあいもありうる)であり、その点では、「欲りし嘆くも」の成立する余地はある。しかし、自分の行為に関する五例の三例までが、個人ならぬ集団を基盤とする傾向の強い東歌に集中することや、その五例の動詞が「いや離り来」(三四二)「平す」(三五四六)「た廻り来」(二二五六)「払ふ」(三四八九)「いや敷き増す」(四一三五)のように客観性を色濃く持つのに対し、「欲りし嘆く」は主観性が強いことなどに思いを致すならば、「欲りし嘆くも」に落ち着かぬものを感じたのは、本稿の思いこみとばかりはいえないであらう。

事実、「も」が自身の嘆きを示すのに荷担するときには、「悲しも」「惜しも」「楽しも」「悔しも」「よろしも」等等、「情意性を表わす形容詞+も」という形になる傾向があり、「嘆くも」の形を文末に据える例は存在しない。「嘆く」との関連で「も」を最後に据えても、

朝曇り 日の入り行けば 御立たしの 嶋に下り居て 嘆鶴鴨 (卷二、一八八)

君に恋ひ いたもすべなみ 奈良山の 小松が下に 立嘆鴨 (卷四、五九三)

向つ峰の 若桂の木 下枝取り 花待つ間に 嘆鶴鴨 (卷七、一三五九)

かきつはた 丹つらふ君を いささめに 思ひ出でつつ 嘆鶴鴨 (卷十一、二五二)

我が背子を 今か今かと 待ちをるに 夜の更けぬれば 嘆鶴鴨 (卷十二、二八六四)

さ夜更けて 妹を思ひ出で 敷袴の 枕もそよに 嘆鶴鴨 (卷十二、二八八五)

朝去にて 夕は来ます 君ゆゑに ゆゆしくも我は 歎鶴鴨 (卷十二、二八九三)

……ぬばたまの 夜はすがらに この床の ひしと鳴るまで 嘆鶴鴨 (卷十三、三二七〇)

……はろばろに 家を思ひ出 負ひ征矢の そよと鳴るまで 奈氣吉都流香聞 (卷二十、四三九八)

のように、本来自問の助詞である「か」を伴うだけ意味の広がりのある「かも」の形を採ることに一定しており、しかも、大部分は、「嘆く」と「かも」との間に、確認の助動詞「つ」を併用している。やはり、ホリシナゲクモの訓は避けるのが無難であらう。

だからといって、いまの結句には、ツルカモを呼びこむゆとりはまったくない。また、ホリナゲクカモなら理論の上では成りたつけれども、さきほど述べたように、万葉の動詞「欲る」は連用形しかなく、その「欲り」が他と複合するときには、かならずサ変動詞を伴うことを思えば、万葉の歌語としては認めることができない。

・ならば、Dのホリシナゲカフはどうか。これには、Cの所有していた不安はない。「嘆かふ」という語法も、万葉に七例ばかりあつて難がない。ありうる一訓と認められはするものの、「嘆かふ」には文末に用いられた例のないことに、いささか疑問が伴う。それは、

……籠り恋ひ 息つきわたり 下思ひに 奈氣可布我が背 (卷十七、三九七三)

我が背子に 恋ひすべながら 葦垣の外に奈氣加布 我れし悲しも (卷十七、三九七五)

のごとく、連体形の用法ばかりである。用例主義は真の実証ではかならずしもない。語法とか調べとかの上で、その時代性や社会性に調和しうる面があれば、用例に恵まれなくても存在を主張してよいばあいは、いくらあつてもよい。しかし、時代や社会によりふさわしく、かつ用例にも恵まれるなら、そちらに拠るべきであろう。

そこで、組上に載せたくなるのは、「嘆く」の語を持つ歌の結びとして、さきほど挙げた「嘆きつるかも」のほか、「嘆かむ」という形が一方の旗頭として存在し、万葉調の一つをつくりだしている点である。次のとおりである。

風をだに 恋ふるは羨し 風をだに 来むとし待たば 何香将嘆 (卷四、四八九)

豊国の 企救の浜辺の 真砂地 真直にしらば 何如将嘆 (卷七、一三九三)

秋山の したひが下に 鳴く鳥の 声だに聞かば 何嘆 (卷十、二二三九)

百代しも 千代しも生きて あらめやも あが思ふ妹を 置嘆 (卷十一、二六〇〇)

敷島の 大和の国に 人二人 ありとし思はば 難可将嘆 (卷十三、三三四九)

霞みある 富士の山びに 我が来なば いづち向きてか 伊毛我奈氣可牟 (卷十四、三三三七)

稻春けば かかる我が手を 今夜もか 殿の若子が 等里豆奈氣可武 (卷十四、三四五九)

殖竹うゑたけの 本さへとよみ 出でて去なば いづし向きてか 伊毛我奈氣可牟イモガナグカム (巻十四、三四七四)

山川さんせんの 隔とぎへを遠み はしきよし 妹を相見ず 可久夜奈氣加牟カクヤナグカム (巻十七、三九六四)

このほか、記紀歌謡にも、齊明女帝の御製として、次の一首がある。

今城いまきなる 小山こやまが上に 雲だにも しるくし立たば 那爾柯那鯁柯武ナニカナグカム (紀歌謡一一六)

右によれば、今日まったく見捨てられてしまったAの訓、ホリテナゲカムの価値が再考されてよいことが知られるであろう。ただ、ホリテの形は万葉語として考えにくいから(既述)、語法の上でも万葉人に即した別訓を打ち出す必要がある。その訓は、ホリシナゲカムしか考えがたいであろう。

ナゲカムの訓を提出した真淵は、改訓の理由を一言も記さない。だが、このムは連体形でなければならない。

右に例示した「嘆かむ」は、その大部分が、上に、係助詞「か」または「や」を要求している。第四例(二六〇〇)のように、第三句「あらめやも」で終止する例も、形の上ではそこで切れつつも、内容の上では、結句と、感動によつて響き合う広義の係り結びと見るべきである。だから、目下の一例だけを終止形と理解することは許されない。この歌も、上に、「嘆かむ」に対応する何らかの係りがほしい。そこで考えられるのは、最初に示した二九六三の「人之宿 味宿者不寐哉 恋ひわたりなむ」の用例に対応させて、一首を、

人所ヒトノ寐 味宿ウマイノ不寐ヌヘ 早敷ハヤシ八四 公目尚キミガメスラ 欲ホリシナゲカム 嘆

と試訓する案である。

ただし、当面の歌は人麻呂集歌なのだが、その中でも、助詞や助動詞にあたる部分をえてして省記する、詩体歌に属する。ところが、このような歌においても、係りの「や」や「か」は、疑問副詞や疑問代名詞を含むばあいを除いては表記されるのが普通である。いまの一首を含む巻十一人麻呂集「正述心緒」だけに限っても、

恋ひ死なば 恋ひも死耶シヤ…… (二三七〇)

……今哉来座 恋ひつつぞをる (二三七九)

はしきやし 誰が障鵬サカフカモ…… (二三八〇)

恋ひ死なば 恋ひも死哉…… (二四〇一)

のように書かれるのが一般で、省略したと覺しき例は、

是くのみし ^かみし 恋 ^{こひ}度…… (二三七四)

しかない。その点、「味寐は寝ずや、欲りし嘆かむ」にも、一抹の不安が残る。しかし、古典集成の原稿の段階では、如上の試行錯誤の結果、一往、この試訓を提供したのであった。

ところが、討論の席上、橋本四郎氏は、この歌のばあい、前掲の二六〇〇と相似て、間投助詞「ハ四」で括られる第三句の感動詞、いわば未分節の感動を示す語である「早敷ハ四」と第四句以下の分節的な感動文とが広い意味での係り結びの機能を果すと見てよく、したがって、第二句をわざわざウマイハネズヤと訓む必要はあるまい、という意見を提出され、しばらくの沈黙を経て、井手至氏も賛意を表された。

「はしきやし」は、感動詞の性格の濃いばあいと形容詞の性格の濃いばあいとある。いまの歌は、第四句が「君が目すらを」と歌い、「すらを」に逆接の意が深い詠嘆を伴いながら暗示され、そこで、しばしの中止(間)を持つ。よって、この「はしきやし」は感動詞と理解するのが作者の意図に即していると考えられる。この歌には、次のような異伝が記されている。

或本の歌には「君を思ふに 明けにけるかも」といふ

これによれば、「人の寝る 味寐は寝ずて はしきやし 君を思ふに 明けにけるかも」という別の一首が構成される。別の一首では、第四句に「君が目すらを」のような間はなく、第三句から結句までまっすぐに呼吸が流れる。つまり異伝歌にあつては、「はしきやし」は形容詞の性格が強く、全体が「けるかも」の単純な形で結ばれることになる。疑問詞が上に来れば下が連体形となるように、「やし」で括られる感動詞「はしきやし」に対して、下の「嘆かむ」を連体形と理解することは、無理な解釈ではありえないであろう。この解釈によれば、ウマイハネズヤのヤに相当する文字がないとかあるとかの問題を考慮しないですむ。

以上のようにして、一首の訓は、

人所^{ヒトノ}寐^{ヌル} 味宿^{ウツク}不^レ寐^{ヌス} 早敷^{ハヤシ}八四 君目^{きみめ}尚^{ナウ} 欲^{ホシ} 嘆^{ナゲム}

に定まり、古典集成での頭注は、次のようになった。

2369 人様^{ひとさま}がするような共寝はできずに、ああ、あ、せめてあの方^{かた}の顔だけでも見られればと思つて、溜息^{ためいき}ばかりつくことであらう。へ或本、いとしいあの方を思っているうちに、すっかり夜が明けてしまった〜

◇味寐 快眠。男女の共寝に限って言う。◇はしきやし 感動詞。異文の場合は、形容詞「はしき」に間投助詞のついた形。◇目すらを 二人の仲では目を見ることなど当然なのに事新たにその目だけでも、の意。

* * *

恋死 恋死耶 玉梓 路行人 事告兼 (二三七〇)

これはさきの一首の直後に配列された、やはり人麻呂歌集の歌である。この本文を、旧訓では次のように訓む。
コヒシナバ コヒモシネトヤ タマホコノ ミチユキヒトニ コトモツゲケム

「恋」とは好きな人に逢えない嘆きであつた。いとしい相手と離れていて、逢いたい逢いたいと思う苦しみが「恋」であつた。そして、そのように思い焦れる相手の名とか状況とか、あるいは自分の恋い焦れる様子とかは他人には洩らさないのが、古代の恋人たちの習いであつた。だから、「あの方はこの私を恋死^{こひじ}してしまえとでもいうのか、縁もゆかりもない道行き人に言伝を頼んだのであるう」という、旧訓による解釈は、その習いを逆説の形で述べたと見るなら、けっこう成りたつようにも思える。しかしながら、相手の言葉に關するかぎり、それを持ち望む歌は多いけれども、望まなかったり、また折角到來した言伝を怨んだりする発想は、万葉にはない。

月草の うつろひやすく 思へかも 我が思ふ人の 言も告げ来ぬ (巻四、五八三)

我が背子は 幸くいますと 歸り来と 我れに告げ来む 人も来ぬかも (巻十一、二三八四)

さ寝^ながには 誰れとも寝^なめど 沖つ藻の 靡^なきし君が 言待つ我れを (巻十一、二七八二)

といったぐあいである。だから、一首の上二句と下三句との關係はむしろ逆でなければならぬ。「恋ひも死ねとや、あの方の言伝もない」というのが、万葉人の心情なのである。

はたせるかな、嘉暦傳承本と京大本(繕)とは、「言告兼」の「兼」に対して「無」の本文を伝えてゐる。この二本の存在を知らなかつたけれども、本居宣長は、つとに、「兼」は「無」の草体の誤まりで、コトモツゲナクと訓むべきだと言つてゐる(『万葉集略解』所引)。こうして、今日ではこの訓が定訓とされている。

しかし、この訓にも不審が残る。一首の第三・四句は、「玉梓^{タマホコ} 路往占^{ミチユキウラ}」(卷十一、二五〇七)「玉梓乃^{タマホコノ} 道去^{ミチユキ} 褫^{ツド}」(卷八、一五三四)「玉梓之^{タマホコノ} 道去夫利^{ミチユキフリ}」(卷十一、二六〇五)のような例もあるものの、枕詞「玉梓の」は単独の「道」にかかるのが一般であり(三〇例)、しかも、その中に

玉梓之^{タマホコノ} 道来人乃^{ミチクルヒトノ} (卷三、二二〇)

玉梓乃^{タマホコノ} 道来人乃^{ミチクルヒトノ} (卷十三、三二七六)

玉梓之^{タマホコノ} 道来人之^{ミチクルヒトノ} (卷十九、四二二四)

のような対応する表現があることを思うと、『万葉集新考』(井上通泰の改訓、タマホコノミチユクヒトノに拠るべきであろう。が、このばあい、作者にとつて縁もゆかりもない、道を往く人について相手の言伝がないと嘆くのは、何としても自然でない。赤の他人である第三者が相手の大切な言伝を持つてくることなど通常考えられないからである。「玉梓の道行く人」は、文字どおり、すべて路上を往来する第三者(他人)でしかない(二〇七・一七三八・三三三五参照)。その点は「道来人」でも同じである。

万葉の時代には、「道行占」という習俗があつた。とくに言霊が活動する時間帯と考えられた薄暗い夕方、道辻に立つて、行き交う人の言葉の片端から吉凶を占う呪術がそれで、これを別に「夕占」とも言つた。同じ人麻呂歌集(寄物陣思)の次の二首は、その習俗の存在を伝える好例である。

言霊の^{ミコトノ} 八十の衢^{ヤチノ}に^{ミチ} 夕占問ふ^{ユフギノトモフ} 占まきに告る^{ウラナヒ} 妹は相寄らむ^{イモトヨロム} (卷十一、二五〇六)

玉梓の^{タマホコ} 道行占に^{ミチユクウラ} 占へば^{ウラナヒ} 妹は逢はむと^{イモトアハム} 我れに告りつも^{ワレニツケリ} (卷十一、二五〇七)

案ずるに、当面の一首もこの線であらえるべきで、下三句は、そのような「夕占」、つまり「道行占」をなしうる言葉も発せず人か道を往くことに、何もかもに見離された悲しみを託しているのではあるまいか。この点

日本古典文学全集『万葉集』(③)に、「言も告げなく」に注して、「相手が通りすがりの人に連絡を頼むことさえないことをいう」と、通説に従いながらも、別途に、「あるいは、通行人のことを聞いて吉凶を判断する夕占に、相手が来る見込みがないことをいうか。」という一案を示しているのは、卓見だと思ふ。

ただし、一首をこのように理解するなら、その結句は、コトモノラナクと改訓すべきであろう。すでに、池上楨造氏(『万葉人の言語生活』万葉集大成)が明らかにされたように、万葉人の口頭による言語行為をあらわす語としては、イフ・ツグ・カタル・ノル・マラス・トフ・タヅなどがあり、それを受けるのがキクであったが、そのうち、ノルは、「名」とか「占い」とか、タプーに関するものについて使用されるところに特色がある。それは、祝詞や宣命におけるノルにもつながる、本来、呪力を持った重々しい発言について用いることばだったのである。先刻挙げたト占の歌二首について、「占正謂」(二五〇六)「我^{ワレニリツモ}謂」(二五〇七)の訓が定まっているのも、右のような事情が下地にあつてのことである。

「玉梓の道行く人」自体は、単に道を行く人、まさに通りすがりにすぎない。しかし、一首の作者はこの人々の言語行為に聖なる「道行占」を任意に判断しているのである。「道行く人」としては、そのことばは氣ままに発せられるただの言語でしかないけれども、作者にとつては、相手が来てくれるかどうか、来てくれるとすればいつなかを定めようとする神語なのである。結句の訓は、作者の側からすれば、コトモノラナクでなければなるまい。そしてこの訓は、井手・橋本両氏によつても支持された。

なお、「玉梓の」は「道」の枕詞であるが(他に「里人」にかかるものが一例ある—二五九八)、この枕詞について、日本古典文学大系『万葉集』(一)の補注(三三九頁)に、「玉」は靈魂のタマ、「梓」は陽石で、三叉路や部落の入口などに立てた、邪氣を防ぐための道祖神の一種という説明を行なっている。とすれば、吉き言を得ようとするト占に関するいまの歌においては、さきの二五〇七ともども、枕詞「玉梓の」の本義が少なからず作用しているといえようか。

以上のようにして、一首の訓は、

恋死 コヒシナバ 恋死耶 コヒモシメトヤ 玉梓 タマホコリ 路行人 ミチユクリト 事告無 コトモノラナク

に定まり、古典集成での頭注は、次のようになった。

2370 恋死に死ぬなら死んでしまえとでもいうのか、そんなはずはないのに、道を行く人が、あの人に逢えそう
な言葉も口にしてはくれない。

「道行占」(二五〇七)のできる言葉も口にせずに道行く人を見て、嘆く歌。女の歌であろう。

◇死ねとや「とや」は相手の意中を反語的に推測する語法。◇玉梓の「道」の枕詞。

* * *

見度 近渡乎 廻 今哉来座 恋居 (二二七九)

この歌、旧訓は、

ミワタセバ チカキワタリヲ タモトホリ イマヤキマスト コヒツツゾラル

と言ひ、今日もこの訓に従うむきが多い。

しかし、第四句は、

……今香開良武 山吹の花 (巻八、一四三五)

……塩津菅浦 今香将滂 (巻九、一七三四)

年において 今香将巻…… (巻十、二〇三五)

秋風に 伊麻香伊麻可等 紐解きて…… (巻二十、四三二一)

などの例によれば、大系本の改訓、イマカキマストに従うべきであろう。「今」に「や」の接続した確例は、

沖辺行き 辺行き伊麻夜 妹がため 我が漁れる 藻臥束鮒 (巻四、六二五)

があるけれども、これは、疑問の「か」と異なり、詠嘆である。

動詞已然形に接続助詞「ば」の接した「見渡せば」は、いうまでもないことながら、習慣的行為を表わす。

「わたり」は舟の渡し場である。野についても言うという考えがあるが、確証はない。ここも川に関するところ

べく、その渡し場は、作者の日常の生活の中において、すぐその見馴れた所だというのである。そんなに広くない川の、こちら側の渡し場近くに女の家がある、女は、向う岸の渡し場に視点を据えながら、そこに相手の男が立ち現われるのを待っているのである。いづれにしても、この歌の第三句「たもとほり」は、古来、「遠廻りをする」意に解せられ、現われるはずの男の行為とするのが、ほとんど一定した解釈である。人目を避けて、男が遠廻りしながら今にもやって来るかと、待っていると理解しているわけである。

しかしながら、これではどことなし安定しないという直感を覚えて年久しい。理屈の上で追いつめてみると、「たもとほり」（遠廻りをする）と「今か来ます」（今にもやって来る）とが、背きあうように思われてならないのである。舟の渡し場は水の深い所にある。歌心を解く姿勢からは遠ざかるかもしれないけれども、こういう環境において、男にいかなる避き道（廻り道）があるのかという理屈さえ出して見たくなる。

一首には、集中に似た歌が存在する。

見わたせば 近き里みを た廻り 今ぞ我が来る 領巾振りし野に（巻七、一二四三）

がそれである。諸家は、いまの歌の解釈にかならずこの歌を持ち出している。けれども、これは「里み」（里のあたり）で「渡り」ではない。自分が「た廻り今ぞ来」たのであつて相手が「た廻り今や来ます」なのではない。

「間近に見えるあの子の里なのに、人目を避けてわざわざ廻り道をして私は今こそやって来た」というのは、いかにもそのとおりで、すなおに受けとることができる。当面の「わたり」について、「ここは野である」（窪田空穂『万葉集評釈』）などという発言が行なわれているのは、直接参考にならない歌に拠りすぎた結果なのかもしれない。

案ずるに、本歌の「たもとほり」は、参考歌と同様、作者自身の行為を示したもので、結句の「恋ひつつぞ居る」に続くのではあるまいか。そのばあい、「遠廻りして恋いつづけている」というのでは、意が通じない。ところが、「たもとほり」には、一方に、「行きつもどりつする」という意がある。

みどり子の 匍ひ多毛登保里 朝夕に 哭みぞ我が泣く 君なしにして（巻三、四五八）

言はむすべ せむすべ知らに 俳^{タモトホリ} 白栲^{タモトホリ}の 衣袖^{こもせ}干さず 嘆きつつ 我が泣く涙 (巻三、四六〇)

……たわらはの 音^ねのみ泣きつつ 俳^{タモトホリ} 君が使を 待ちやかねてむ (巻四、六一九)

……たわやめの 思ひたわみて 俳^{タモトホリ} 我れはぞ恋ふる 船楫^{ふね}をなみ (巻六、九三五)

など、その例である。「たもとほる」は、「もとほる」に接頭語「た」の接した形であるから、原形「もとほる」をも見る必要がある。が、このばあいは、同じ所をめぐる意がもっと徹底している。次のとおりである。

神風の 伊勢^{いせ}の海の 大石^{おおいし}に 這^{モトホリ}ひ母登富呂布^{モトホリ} 細螺^{しじら}の い這^{モトホリ}ひ母登富理^{モトホリ} 撃ちてしまむ (記歌謡一四)

なづきの 田^{いな}の稻幹^{いなぎ}に 稻幹^{いなぎ}に 這^{モトホリ}ひ母登富呂布^{モトホリ} ところづら (記歌謡三五)

……ぬばたまの 夕^{ゆふ}になれば 大殿^{だいでん}を 振り放け見つつ 鶺鴒^{せいてい}なす い匍^{モトホリ}ひ廻^{モトホリ} さもらへど さもらひえね

ば…… (巻二、一九九)

用例によっても明らかのように、「たもとほる」は、「待つ」「恋ふ」「泣く」「嘆く」などにかかるときには「おろおろと行きつ戻りつする」意となる。対して、「来」(一二四三・一二五六・一五七四・三九四四)「往く」(二五四二)「過ぐ」(三九九二)などとかかわるときには「遠廻りする」意となる。当面の歌において、それを、「今か来ます」にかかわらせるなら古来の解のようにするのが、結句の「恋ひつつぞ居る」に接続するものと見るならば、当然、一方の語義を採択しなければならない。そして、これによれば、「たもとほり」(遠廻りする)と「今か来ます」とのかかわりに対して覚えた年来の違和感は拭われることになる。つまり、上二句「見わたせば近き渡り」は、「ほんの間に近に見わたせる渡し場なので、あの方がお見えになればすぐわかるはずなのに」の意の表現であり、下三句「たもとほり今か来ますと恋ひつつぞ居る」は、「それなのに、私は門の前を、おろおろ行きつ戻りつしながら、今にもあの方がおいでになるかと待ちつづけている」の意の表現と見なされる。

さきに、「たもとほり」を男の行為とするのは、従来の「ほとんど一定した解釈である」と言った。「ほとんど」の語を用いたのは、『万葉集私注』(土屋文明)に、「タモトホリは来るべき男の行動と見られる。」としながら、別の案として、

卷六、(九三五)の「たわやめの 思ひたわみて たもとほり 吾はぞ恋ふる 船楫をなみ」などからすれば、待つ女の行動ととれぬこともない。さう取れば、一層個人的な作として味はへよう。

という見解を提出しているからである。歌人の心歌人を知るといふべきか。本稿の見解は、結果として私注別案を本稿なりに掘りさげる形となったけれども、この解釈は、井手・橋本阿氏の、むしろ積極的な支持をうけて、古典集成での頭注は、次のようにまとめられた。

2379 見わたしたところ、ほんの間近の渡し場であるのに、私は行ったり来たりしながら、今にもあなたがいらつしやるかと、待ちつづけております。

対岸になかなか現われぬ男を待ち焦れる歌。

◇見わたせば 習慣的行為を示す。◇た廻り 行きつ戻りつする。結句にかかる。「た」は接頭語。

* * *

さきの歌の「見わたせば近き渡りを」の「を」に対して、近代の諸注は「くなのに」とか「くであるものを」とかの訳をあて、接続と感動とを兼ねた機能をそれに感じとっている。正しい姿勢といえよう。だが、万葉歌全般について見ると、諸注の助詞「を」に対する態度は、一様に、厳しさをいちじるしく欠いている。

古代の「を」の用法はきわめて複雑である。文脈におけるそのありようによって、(イ)間投助詞、(ロ)終助詞、(ハ)係助詞、(ニ)格助詞、(ホ)接続助詞等々の名をもつて呼ばれるのが普通で(係助詞を認めるむきは少ない)、グループとしては、(イ)(ロ)と(ハ)(ホ)の二つに大別され、(イ)(ロ)が俗に感動の助詞と呼ばれているのであるが、(ハ)(ホ)において、どれをどの助詞の範囲に帰属させるかは人によって少なからぬずれがあり、一つの名のもとに限定できない範囲の広さを常に持ちつつ、感動性を包含しているばあいが多い。かつて論じたように「(ハ)に恋ふ」と「(ホ)を恋ふ」(国語教育二十二号、昭和三十四年七月)、中でも、語ならぬ句ともいふべき表現を包みこむ形の「を」には、(ハ)(ホ)と見られるばあいでも感動性の露出が顕著であり、古代の「を」においては、係・格・接続などはまだ分化されていなかったのではないかと錯覚されるばあいが多い。そして、その後の経験では、このような処遇をなすべき

例は体言相当の語に接する形の「を」にも認められることさえあり、古代の「を」については一度根こそぎ洗ひなおしてみる必要がある。そういうわけで、古典集成『万葉集』では、助詞「を」については、互いにとくにこまやかな神経を注ぐことが約束された。伊藤担当分の中から、二つ三つ、その実例を挙げてみよう。

吾恋之 アガコフル 事毛語 コトモコト 名草目六 ナグサメ 君之使乎 キミガツカヒ 待八金手六 マツヤカサム (二五四三)

初句は、普通アガコヒシと訓まれている。が、ここでは、「之」を漢文式の不読助字と見て、大系本にワガコフルと改め、動詞「恋ふ」に一人称代名詞がかかわるときには、一、二の例外を除いて、仮名書例のことごとくがア・アレの形を取るのに従って、桜楓社本『万葉集』に、これをさらにアガコフルと改訓したのによる。漢字仮名交り文では、一首は、

我が恋ふる あ ことも語らひ 慰めむ 君が使を 待ちやかねてむ
となる。

第三句「慰めむ」は連体格である。しかし、第四句の「を」に対する関心がないために、従来の解において「我が恋ふることも語らひ慰めむ」が下のどの語に続くのか明確でない。たとえば、『万葉集注釈』(澤瀉久孝)では、

私が恋してゐた事もいろいろ話して心を慰めようと思つてゐる君の使を、待ちうけることが出来ないのだからか。

と訳しており、近代の訳はすべてこの範囲を出ない。右の訳は、むしろ、「我が恋ふる……慰めむ」を「君が使」に続くものと見てのものである。けれども、「我が恋ふる」から「君が使」までの全体を承ける「を」は、現代語でそのまま「を」に置きかえてよいような簡単な機能を持つものとは思えない。一首の嘆きの盛りあがりはこの「を」にこそ存在するに相違なく、それは、一首を、

せめて、私が恋い焦れるこの苦しみなど話して、憂さを紛らわしたいあの方のお使いなのに、そのお使いすらも、私は待ちうけることができないのであらうか。

のように理解することを求めての布石と考えられる。本人はもとより間使いすらも待ちうけることのできない作者のやるせなさは、「を」にこめられた厚い思いを素通りするのでは浮上してこないであろう。

この歌の近所には、「君が使」に「を」の接続した歌が、ほかに二首ある。一つは

誰そそれと 問はば答へむ すべをなみ 君が使乎 帰しつるかも (二五四五)

であり、たとえば、『万葉集全註釈』(武田祐吉)には、

あれは誰かと、人が尋ねたら答へるすべが無いので、あなたのお使を還してしまひましたよ。

という訳をあてている。「乎」を格助詞だけのはたらきと見ての解である。しかし、今日のこの共通理解はあまりにもとどかない。この「を」も、格とか接続とかの一筋縄で規定できない「を」なのではないか。すなわち、

「誰なのか、使いをよこすその人は」と尋ねられたら、どう答えたらいいかすべがないので、せっかくのあなたのお使いなのに、すべなく帰してしまいました。

とても訳さないかぎり(誰かと尋ねるのは母親であろう)、歌の真意に触れたことにならないのではなからうか。

もう一つは、

かくだにも 我れは恋ひなむ 玉梓の 君が使乎 待ちやかねてむ (二五四八)

である。例を歌心の理解では抜群であるとの定評を持つ『万葉集評釈』(窪田空穂)に取ってみても、

せめてこのようにだけでもわれは恋うていようと思う。その君の使を、待ち取り得ないのであろうか。

という訳しかあてていない。「使を」の下に点を打っているのは、さすがに、「を」に何かを感じ取ったからなのであろう。けれども、やはりとどかないのは同じで、一首を注者がどのように把握したのか、はつきりしない。

これも、「を」の重層性に着目して、

これほどまでにせつない気持で、これからも私はあの方を恋ひ慕ってゆくことであらう。しかしそれにしても、あの方の言伝の使いすらも待ちうけることができないのであろうか。

とても理解しないことには、歌を解いたことにはならないのではなからうか。

このように「を」のはたらきに留意するならば、それによって一つの試訓を提供できるばあいさえある。

希^{メツラシキ}將^{シト}見^ミ 君^{キミ}平^{ヒラ}見^ミ常^{トコ}衣^イ 左^{ヒダリテ}手^テ之^ノ 執^{ヒツ}弓^{ユミ}方^{カタ}之^ノ 眉^{コノメ}根^ネ搔^{カキツレ}礼^レ (二五七五)

この歌は集中の難訓歌の一つである。が、第二句以外は、今日、右に付した訓で一定している。初句は、旧訓マレニミムであつたけれども、『校本万葉集』によれば、『代匠記』の初稿本書入れにメツラシキが試案として示されているという。「希將見」をメツラシと訓む例は、

希^{メツラシキ}將^{シト}見^ミ 人^{ヒト}に見^ミせむと…… (巻八、一五八二)

希^{メツラシト}將^{シト}見^ミ 跡^{シト} 我^{ワレ}が思^{オモ}ふ君^{キミ}は…… (巻八、一五八四)

……朝^{アサ}な 朝^{アサ}な なれはすれども いや希^{メツラシキ}將^{シト}見^ミ裳^モ (巻十一、二六二二)

……藤^{フジ}衣^イ なれはすれども いや希^{メツラシモ}將^{シト}見^ミ毛^モ (巻十二、二九七二)

などがある。

むつかしいのは第二句である。旧訓には「君^{キミ}平^{ヒラ}見^ミ常^{トコ}衣^イ」とする。「常」を助詞の「と」(乙類)にあてた例は、「よしとよく見て好^{ヨシト}常^{トコ}言^{イハ}ひし」(巻一、二七)以下、たくさんある。「衣」を助詞の「ぞ」「そ」「とも」にあてた例も、「た廻^{イマワ}り今^{イマ}衣^イ我^{ワレ}が来る」(巻七、一二四三)以下、多数ある。しかし、結句は「眉^{マヨメ}根^ネ搔^{カキツレ}礼^レ」で已然形である。上にはコソがこなければならぬ。それで、『万葉代匠記』(精撰本)に「君^{キミ}平^{ヒラ}見^ミ常^{トコ}衣^イ」(脱字説)とし、『万葉集古義』に「君^{キミ}平^{ヒラ}見^ミ常^{トコ}社^{シャ}」(誤字説)とした。

けれども、脱字・誤字を考える以前に、このままで「……トコソ」と訓めれば、それにこしたことはない。これは、大系本に、「常^{トコ}をトコ、衣^イをソと訓む」としているのが正しいであろう。「常」をトコと訓むことは、「常^{トコ}登^{トバ}婆^ハ」(巻二、一八三)「常^{トコ}之^ノ陪^ヘ」(巻九、一六八二)など、枚挙にいとまがない。ここではトコの借訓として「常」を用いたのである。

こうして、今日では、大系本の試みた「君^{キミ}平^{ヒラ}見^ミ常^{トコ}衣^イ」が最も有力視されている。これだと八音の字余りになるけれども、桜井茂治氏(『万葉集のリズム』国学院雑誌昭和四十六年九月号)の、推量・意志を表わす助詞ムがあると

きには字余りは許されるという説に従えば、問題はなくなる。たしかに、その確例は、

……付賜將 島の崎々 依賜將 磯の崎々…… (卷六、一〇二二)

……黄楊の小櫛も 将取跡毛不念 (卷九、一七七七)

……荒磯卷而寐 君待ちかてに (卷十、二〇〇四)

……たまれる水の 玉似有将見 (卷十六、三八三七)

……越へにやらば 比登加多波牟可母 (卷十八、四〇八二)

などがある。

しかしながら、この訓は、ヲを格助詞と見ての試訓である。古代において格助詞ヲは成立していると見てよい面があるから、それはそれで考えられる訓ではあるものの、ヲがメヅラシキミを包む形になることを思えば、例によって、これを格の面だけで考えるのは危険なのではなからうか。これまた、感動性を色濃く發揮する一例と見る余地は充分にあろう。そう見るとき、この第二句については、「……君乎見常衣」の訓が成立すると考えられる。キミヲミエトコソも八音で字余りになる。けれども、句中にヤ行音があり、その上にくる音節の尾母音がiまたはeであるとき、すなわち、ヤ行子音jがその上の尾母音iまたはeと接するとき、字余りはさしつかえないという佐竹昭広氏の説(『万葉集短歌字餘考』文学昭和二十一年五月号)が、今日広く認められていることを思えば、支障はない。この訓によれば、ミエ(見えは命令形であるから、上二句は、「めづらしき君よ、ぜひ見えよ云々」の意となり、相手に逢えるための前兆をあえて作り出す下三句の表現とより一層調和するように思われる。

実は、古典集成での原案は、キミヲミムトコソの訓によって記された。しかし、討論会において、助詞「を」に神経を注ぎながらこの歌に及んだとき、「を」に感動を読みとって別途の解釈はできないものかとの伊藤発言が行なわれた。ほんの三、四分、いささかの言葉が交わされるや、居合せた三人の口から、ほとんど同時に発せられたのが「ミエトコソ」の訓なのであった。討論の稀に見る妙味と貴重な成果というべきか。なお、試訓決定

後、あえて規定するなら、この歌の「を」こそ、二四五二の「照りたる君を」の「を」などと同様、係助詞と見るべきであろうとの橋本氏の発言があつたことを記しておく。

以上のようにして、古典集成では、次のような頭注が据えられた。

2575 めつたに逢えないあなたよ、逢いに来て下さいと、左の弓を握る側の眉根を掻いたのに……。

逢える前兆を作り出して男を待つ歌。二四〇八参照。

◇見えとこそ「見え」は「見ゆ」の命令形。◇左手の弓取る方 弓は左手で持つ。弓は男の代表的な持物であつたので、男を招き寄せるには左側の眉を掻くのが効果があるとされたのであろう。

三

以上のほかに、取りあげて論じたい歌は少なくないけれども、際限のないことなので、一往、このくらいでとどめることにする。

ただ巻十一・十二など、歌の類聚ということに万葉集でもとくに深い関心を注いでいる歌巻においては、その歌の配列の方法を押さえることによって、より有効な積義をほどこしうるばあいが多いことだけは、ついでながら言いそえておきたい。

たとえば、従来、いかなる方針によって配列されたのか明解を得なかった「正述心緒」の部なども、人麻呂集歌、出典未詳歌のいずれの部分も、女の歌いくつかと男の歌いくつかとで一まとまりとなる歌群を何回か繰り返すという配列方法を、整然と貫いている。具体例を、巻十一の人麻呂集歌「正述心緒」(二三八八～二四一四)に取るならば、それは、(1)二三八八～二三七二、(2)二三七三～二三七七、(3)二三七八～二三八八、(4)二三八九～二三九七、(5)二三九八～二四〇四、(6)二四〇五～二四〇八、(7)二四〇九～二四一二、(8)二四一三～二四一四の八群に分れ、その各群が、かならず「女の歌某首十男の歌某首」の次第を貫いており、各群の冒頭に女の歌かどうか曖昧な歌が存在することや、各群の中の男歌群の始めに男の歌かどうか判断に苦しむ歌が存在することは、けっし

てないのである。かような類聚法は、編者のもとに寄せられた資料を尊重した結果にちがいない。このような見方に立つと、一首一首について、どれが女の心を表わすか、また、どれが男の心を表わすかという、従来ほとんど無関心であった事柄についての判断がはっきりしてくる。また、資料ごとの用語や発想の特色が浮きぼりにされたりもする。ここに新しい解釈が開けてくるのは、喋々するに及ばない。

一方、これも、従来素通りにされてきたことだが、巻十一・十二のあちこちに登場する「問答歌」なども、正述心緒の問答、寄物陳思の問答、あるいは、悲別の問答、羈旅発思の問答という点に留意して、整然たる類聚がほどこされている。編者の理解と作者の意図とは常に直結するとはかならずしも言えないものの、このような事実を発見することによって新しい解釈をおさめうるばあいも少なくないのである。

この類聚の様相については、すでに機会を得て何回か論述した。そこでは、その様相との関連によって導かれる、いくつかの歌々の釈義についても、簡単なが示すところがあった。今回は、類聚に関する事柄はあえていっさい無視して、一首一首の表現に即して物を見る態度に終始した。この立場での釈義が、発見された類聚法を考慮しての釈義と、いまのところ、背反する面がないことを言いそえて稿を閉じることにする。(昭和五十五年八月十一日稿)

あとがき

昭和五十年四月、筑波大学に着任以来、学群(他大学の学部)の古代文学演習において、ずっと巻十一を読んできた。本稿はその演習での読み方なるべく忠実に反映するようにし、今後、古代文学演習に加わる学生への参考に供することも考慮したので、専門家にとつては必要のない記述が多いであろうことをおことわりしておく。なお、脱稿後、本稿の古代助詞「を」に対する姿勢とは異なる、近藤泰弘氏の論文「助詞「を」の分類―上代―」(国語と国文学昭和五十五年十月号)に接した。しかし、本稿の姿勢を改める必要はないと判断した。古代の助詞「を」に関しては、諏訪嘉子氏の「万葉集における助詞」を(万葉十三号)が最も参考になる。最後に、本稿は、念のため、井手至・橋本四郎両氏の校閲を頂いたことを付記し、両氏の好意に感謝申しあげる。